

仲直りの秘策

辻 憲男（文学部教授）

イワノヒメは気性の激しい女性だった。古事記によれば、何か事があると「足もあがかに」嫉妬した。地団太踏んで、大王・仁徳にも遠慮しなかった。浮気に怒って難波宮に帰らず、舟で淀川～木津川をさかのぼり、筒木の韓人ヌリノミの家にとどまった（今の京都府京田辺市）。そこは平城山（ならやま）の北側の入り口で、歌姫を越えれば、かなたにわが故郷・葛城が望まれる。父祖は誇り高き大豪族葛城氏である。大雨の中、大王の使者が水たまりにすわって言上したが、ヒメは聞き入れない。使者の紅い腰紐が浸って、青衣が紅色に染まってしまった。さて仲直りの秘策とは？…大王への報告は、「ヌリノミの養う虫が、はう虫になり、卵の殻のようになり、飛ぶ蛾になるので、大后はそれを見に行かれただけです」。大王が「それなら我も見に行こう」と応じたので、夫婦はヌリノミの家で仲良く、珍しい蚕を見物したという次第。意地の張り合いがこじれる元です。

ところで、万葉集のイワノヒメは、

君が行き日（け）長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ
などと、ひたすら夫を恋い慕う歌の主人公。しかしそのほの暗い情念は、昭和10年の歌曲「平城山」の、

人恋うは 悲しきものと 平城山に もとおり来つつ 堪えがたかりき
いにしえも 妻に恋いつつ 越えしとう 平城山の路に 涙おとしぬ
にも底流している。古代は夫をも「つま」と呼んだ。北見志保子のこの歌詞からは、伝説のヒメたちの悲しい声も聞こえてくるようだ。



平城山のイワノヒメ陵。秋は「山尋ね」の感が
いっそう深い。